Ａｕｇ　２０１４　Ｎｏ．４０

大垣市金生山化石館

化石館だより

コラム

金生山の赤鉄鉱

金生山は石灰岩から成る山で、保存の良い豊富な化石や、豊かな色彩をもつ大理石の産地として有名ですが、山中に赤鉄鉱の鉱床があり古くは鉄の産地でもありました。赤鉄鉱はありふれた鉱物で地球上には非常に多く存在し、主に製鉄の原料として用いられています。また、赤褐色（橙赤色）の鮮やかな色は、ベンガラという顔料として古代から用いられてきました。金生山の表土は、この赤鉄鉱で赤く染められており、麓の赤坂町の町名はこれに由来すると言われています。

今から約 1300 年前、壬申の年（672 年）、大海人皇子は関ヶ原で大友皇子の軍を打ち破り、皇位継承をかけた争いに勝利しました。壬申の乱とよばれるこの戦では、いち早く動員された美濃の軍勢が大活躍しました。短期間に 3000 人もの軍勢を整えられたのはなぜなのでしょう。そこには金生山から産出する赤鉄鉱が大きな役割を果たしていたと考える人がいます。

← 金生山の赤鉄鉱

金生山の赤鉄鉱床については、 これまであまり知られてきませんでしたが、山上の明星輪寺から少し北に登ったところに、幅 50m、高さ 20m、長さ 300m もの鉱脈が露出していました。鉄器が日本に入ってきたのは弥生時代ですから、壬申の乱当時には製鉄の技術も伝わっていたと思われます。また、このころ金生山の東に広がる池田町や神戸町は、安八磨郡湯沐邑（ゆのむら）とよばれる大海人皇子の直轄領でした。短期間に 3000 人もの軍勢を整えられたのは、金生山の赤鉄鉱を用いて武器の製造や備蓄がなされていたからではないかというのです。

壬申の乱の 14 年後、朱鳥元年（686 年）には、持統天皇の勅願により金生山山頂に明星輪寺が建立されています。明星輪寺は正式には「金生山明星輪寺」といい、金生山の名はここに由来します。金を赤鉄鉱と結びつけて考えると、これを守ろうとしたとも考えられます。　このような仮説に関する確たる証拠は見つかっていませんが、仮説を裏付けるような事例はいくつも存在します。その一つ、金生山の周辺には古墳がたくさん存在しますが、中でも大塚古墳は墳丘長 150m もあり、岐阜県最大の前方後円墳

です。こうした古墳があるということは、強い権力をもつ集団が存在したことを示しています。次に、金生山の南には金山彦神社がありますが、８kmほど南西には同じく金山彦を祀る南宮大社があります。南宮大社は美濃国一の宮であり、金（かね）の総本宮として古代以来多くの崇敬を集めています。また、金生山の周辺地域には、古代から渡来系の集団が多く居住していたようです。その中に鉄と関係の深い人々がいても不思議ではありません。西隣の不破郡垂井町には美濃国二宮である伊富岐神社がありますが、この神社は鉄と関係の深い伊福氏を祀っています。さらに、金生山の山中からは多くの鉱滓が見つかっているのです。これが作られた時代は定かではありませんが、製鉄を行った形跡は確かに見られるのです。

↑　山中で採集した鉱滓

刀銘「宗吉」と称する美濃千手院の手による古刀があります。美濃千手院は、金生山の鉄を採掘し、麓で製鉄してこの刀を作っています。金生山の赤鉄鉱で日本刀を再現しようとした記録もあります。これは関市の刀匠、大野兼正氏によるもので、昭和 59 年に南宮大社境内で作られました。その際用いた赤鉄鉱の分析では鉄の含有量は 40%程度だったようですが、60%を超える鉱石もありました。

金生山の赤鉄鉱は、太平洋戦争の最中、軍の注目するところとなり、昭和 19 年から採掘が始められ昭和 25 年まで続けられました。その際鉱脈のほとんどが採掘され、鉱石は八幡製鉄所に送られています。当時の鉱石は極めて良質であり、第二酸化鉄（Fe_2O_3）91%という分析結果が残っています。古代の人々はこのような良質の鉱石を露天掘りで利用できたと考えられます。軍が採掘を始めた当時、既に鉱脈があった部分は窪地となっていたそうです。古代の人々が鉄の採掘を行っていたことはこのような地形からも伺えます。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆　　**お 知 ら せ**　　◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

展示解説をします　ご利用ください

来館される方に対し、館長やボランティアが、展示化石や金生山の地史などについて解説を行っています。団体の方だけでなく、個人利用の場合でも解説します。必要な方は来館時、受付で申し込んでください。

ボランティア不在の時や、館長が忙しい場合はお断りする場合もあります。ご容赦ください。

問い合わせ：　大垣市金生山化石館　　電話　（0584）71-0950　（ファックスも同じ）
Email　kasekikan@vanilla.ocn.ne.jp